

| | |
|--------------|---|
| Title | 「マンガ・アニメ共栄圏」を問い直す |
| Author(s) | 金, 日林 |
| Citation | グローバル日本研究クラスター報告書. 2019, 2, p. 20-21 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/72082 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「マンガ・アニメ共栄圏」を問い直す

金日林

マンガやアニメに代表されるオタク文化は、国境を越えるグローバルな文化として認識されている。以前に比べて注目を浴びる作品が減った現在でも、日本のマンガやアニメ文化はその影響力を拡大している。その背景には国家政策や文化産業だけではなく、オタク文化を導いている受容者集団の存在がある。「オタク」と呼ばれる受容者たちは独自の言語体系や意味体系、教養体系を構築しながらオタク文化の影響力を拡大しつつある。

本発表では、戦後日本でカウンターカルチャーとして形成されたオタク文化が世界的な影響力を獲得した後もなお、文化帝国主義の面影を色濃く残している点に注目する。例えば、「ポップ共栄圏」・「アニメ経済圏」のように、既に死語になった言葉を喚起しながら日本を中心に世界を圏域化する試みがよく見られる。否定的に見なされていた戦争期の人物が肯定的に再解釈されるのもサブカルチャーの場である。興味深いことに、オタク文化におけるいわば「政治の芸術化」は、権力システムやエリートのみならず、匿名の受容者集団によって自発的に行われているのである。

以上の問題意識に基づいて本発表では、オタク文化を用いて日本の影響力を拡大しようとする試みを「マンガ・アニメ共栄圏」と称する。いうまでもなく、アジア太平洋戦争期の理念である「大東亜共栄圏」から借用した表現である。オタク文化を介して日本の影響力を拡大しようとする多くの試みは、ポストコロニアルの観点を欠けたまま、帝国日本との連続性及び共通性を強調しているからである。

今回は主に、アジア太平洋戦争当時、大政翼賛会に協力した新日本漫画家協会所属作家たちの「大和一家」シリーズ、台湾の「ニコニコ運動」などを事例に、帝国の権力が人々の日常や感情をコントロールしていたことを論ずる¹。帝国権力は人々のプライベートな

¹ 「大和一家」及び「ニコニコ運動」の存在は、国際日本文化研究センター基幹研究プロジェクト「大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」に参加しながら分かるようになった。大塚英志『大政翼賛会のメディアミックス：「翼賛一家」と参加するファシズム』（東京：平凡社，2018）を参照。

感情にまで介入し、負の感情をコントロールしようとした。「親切的日本人」の表象がその文脈で生まれる瞬間を資料に基づいて検討したい。

戦争が終わっても、表現様式やストーリー、主題歌を通じて戦争用語や理念は継承され続けている。オタク文化は 1990 年代以来、マンガやアニメーション部門における欧米との力関係においては主導権を確保してきた。ところが興味深いことに、東アジアとの関係においては、オタク文化が東アジアにおける公共性になりうるという主張が、従来は批判的とされた知識人の中から出てきている。そうした主張は、帝国日本と旧植民地との共通点や連続性ばかりに注目した結果に基づいている。ひいては、旧植民地の近代性をもっぱら帝国日本によって成されたという観点が前提となっている。

それを裏付けるかのように、オタク文化をめぐる多くの言説が、西欧に対しては日本のオリジナリティを強調する一方、東アジアに対しては日本との相同性を主張する。植民地において「地方色」・「郷土色」を求めていた帝国日本の論法が、今日「グローバル」と「ローカル」という言葉を通して蘇り、受け継がれている。この点からも、オタク文化を通して東アジアのネットワークを構築しようとする動きは、ポストコロニアルの観点を欠けていることが分かる。

帝国日本と旧植民地の共通性と連続性ばかりを強調する観点から脱皮しない限り、オタク文化が東アジアの公共性になれるという主張は、必然的に大東亜共栄圏と繋がることになる。日本のマンガやアニメを通じて国境を越える共同体が生まれるという想像が、「マンガ・アニメ共栄圏」という文化帝国主義を支えることになるのである。オタク文化に蓄積されてきた帝国主義の面影を消す作業を行わない限り、植民地主義は持続するだろう。東アジアとの関係において必要なことは、一方の視座だけではなく、双方向性であると同時に、帝国日本と共通している点ではなく、共通していない点を探る視点である。